さらば晩夏のパリ

保苅瑞穂

ほかり・みずほ
1937年東京生まれ。仏文学者。東大名誉教授。著書に「ヴォルテールの世紀」「プルースト読書の喜び」「恋文」「モンテーニュ」など。

ある朝、寝室のフランス窓をあけると冷えた空気が部屋に流れ込んだ。いくらパリの夏が短いといっても思いがけない冷たさに一瞬わたしは驚かされた。それは街がまだ眠っている夏の夜明けの涼しさではなく、早くも夏が衰えて初秋を肌に感じさせる凛(りん)とした朝の冷気だったからだ。

□ □ □

幼いころ夏休みが終わりに近づくと、どこか郷愁に似た切なさが胸に迫って来るのをどうしていいか分らず、子供心に思い悩んだことがあった。隠退の身となったわたしにはもうそんな夏休みは来ないけれど、それでもあれほど烈しかった夏の輝きが失われてゆくのを惜しまずにいられない。それは子供のころの甘美な切なさとちがって、時が移ろいゆくのを体に感じる寂寥感なのだ。

でもまだパリの夏はすっかり終わったわけではなかった。その証拠に街の住人たちは強烈な南の太陽の下でバカンスを愉しんでいる。おかげでわたしが住む十六区の界隈(かいわい)は見捨てられたように静まりかえっている。日が高くなっても車道には車がまばらで、歩道を行く人影も少ない。街路樹だけが濃い影を道に落としている。白日の下に真昼の静かさが広がって、どこか見知らぬ田舎の街に来たのかと錯覚しそうだ。パリが夏の間漂わせる束(つか)の間の詩情である。

わたしはそれを求めて昼日中あてもなく街に出る。人のいい職人がいる靴の修理屋も、旨(うま)いパン屋も休みだ。カフェ、美容院、額縁屋、花屋、どこも店を閉めた寂しいパッシーの裏街を道が誘うままにさまよい歩く。

いまわたしがこの街にいるのは、五十年も前に留学を終えてパリを去るゆく。

でもなぜだろう。そんな代わり映えのしない暮らしのなかで、例えば晩秋、狭い裏通りの石畳の坂道が雨に濡れて光っているのがいきなりわたしの足を止める。あるいは五月、セーヌ川に沿って亭々と聳(そび)えるプラタナスのあの薄緑の若葉がモネの絵に負けずにわたしを人影も少ない。街路樹だけが濃い影を道に落としている。白日の下に真昼の静かさが広がって、どこか見知らぬ田舎の街に来たのかと錯覚しそうだ。パリが夏の間漂わせる束の間の詩情である。

日、いつか必ずこの街に戻って来ると心に決めたからだった。日本にいてなんど望郷の思いに駆られたか知れない。だが戻って来られるとは正直思っていなかった。その後わたしは運命に操られて古巣のパリに舞い戻っていた。そして長い不在のあとでふたたびこの街での時間が流れ始めた。

□ □ □

それは花の都（だれがそんな名を付けたのか）にいるからといって少しも華やかでなく地味で単調な時間である。本を読むのに飽きて退屈もする。時々近くにあるブローニュの森へ散歩に出る。家で息子か孫のような若い友達と飲むこともある。外国人だということを忘れているときもある。留学生だったころの慌(あわ)しい生活とはまるでちがう静かな毎日が流れている。いったいわたしはいまいつの時代にいるのだろうか。

だがほかでもないパリが生きている記憶の都市なのだ。まだルテティアと呼ばれた二千年前のシテ島のパリも、大聖堂を建立した中世のパリも、国王をギロチンで処刑した革命期や芸術が爛熟した世紀末のパリもわたしたちの傍らにいまも生きた亡霊のように佇んでいる。そのすべてがいまのパリを作り、そのすべてがそこに生き続けている。

□ □ □

これだけ長い歴史があれば、パリはどんなものでも吸い込んでそこに馴染(なじ)ませないではおかない。初めは超近代的だったエッフェル塔もパリに溶け込んで、いまは繊細な鉄のレースをまとった女王のように都を睥睨(へいげい)している。そしてパリ自身はその紋章である荒波にもまれても沈まない船のように幾たびもの革命や戦争に翻弄されながら激浪に堪えてきた。

わたしはそのパリを見下ろすパッシーの高台に出た。

眼下の眺めがわたしを現実に引き戻した。フランスでは夏のバカンスは七月十四日、革命記念日の軍事パレードをもって本格的に開始する。今年も皆が待ちかねた夏が始まった。だがその夜ニースで無辜(むこ)の市民がテロによって虐殺された。

去年の十一月、パリが襲撃されて若い最愛の妻を殺されたフランスのあるジャーナリストは、襲撃のあとテロリストたちに「君たちは私の憎しみを手にすることはないだろう。……憎しみに怒りで応じたら君たちと同様無知に身を委ねることになるだろう」と書いた。わたしはその美しい手記に心が震えて言うべきことばがなかった。そこには憎しみにも残虐にも屈しない強い優しい魂があったからだ。この魂があるかぎりパリは沈まない。

悲しみで始まった夏が終わろうとしている。日がすっかり短くなった。夕方になっても光があふれていつまでも青く澄んでいた空がいま微かに翳って暮れようとしている。もう秋なのだ。わたしはあとなんどパリの夏にめぐり逢えるだろうか。ともあれ去ってゆく今年の夏空にパリの詩人の一行を借りて別れを告げよう。

「さらば、あまりにも短い夏の烈しい光よ」

掲載日　2016年10月2日　日本経済新聞 朝刊　32ページ　©日本経済新聞社 無断複製転載を禁じます。